

02 目次・特集「大学はないけど大学生はいるまち」

08 トップニュース
田辺市プレミアム付商品券事業を実施します
／国民健康保険税率を改定します ほか

14 情報ボックス
住宅耐震診断等の補助をします／軽減税対策
補助金が用意されています ほか

20 相談日程等

22 みんなの広場

26 みんなの彩時記
令和へとつなげる平成最後の熊野本宮大社例大祭
／花見してイベント楽しむ動鳴気峡桜まつり♪ ほか



今月の表紙写真

今月の表紙は、和歌山大学経済学部の新入生。グループに分かれて、田辺のまちなかを楽しそうに散策している様子を撮影しました。

紙面で使用するマーク等の説明

日…日付・期間	定員
時…時間	料金・費用
休…休館日	持ち物
場…場所	申込み・申請方法
集…集合	問合せ
内…内容	[消印]…消印有効
対…対象・参加資格等	[先着]…先着順

◇㊦マークには、振替休日等も含まれます。
◇料金や申込み方法の記載のないものは、不要です。
◇市役所の開庁時間（申込み・問合せ等の受付を含む。）は、㊦を除く㊧～㊨の8時30分～17時15分です。毎週㊩は、市民課・保険課・税務課の一部窓口を19時まで延長しています。



皆さんは、大学連携についてご存じでしょうか。
本市には大学がなく、大学進学を希望する方は、市外や県外に転出している現状があります。
今月号では、大学はありませんが大学生はいるまちを目指した、大学連携の取組について紹介したいと思います。
企画広報課企画調整係
0739(26)9963

大学連携とは

市の現状

市では、進学や就職を機に若者が県外に出て行き、そのまま戻ってこないという状況があり、人口が減少する要因の一つになっています。

大学がないなら、地域自体を学びのフィールドに

市の課題を背景に、市出身者に関わらず、地域に目を向けてもらうための働きかけが必要です。

大学連携の一環として、市を素材に、またフィールドとして学習や活動をすることで、文化や歴史に触れ、地域住民と交流し、魅力を知ってもらう機会となります。

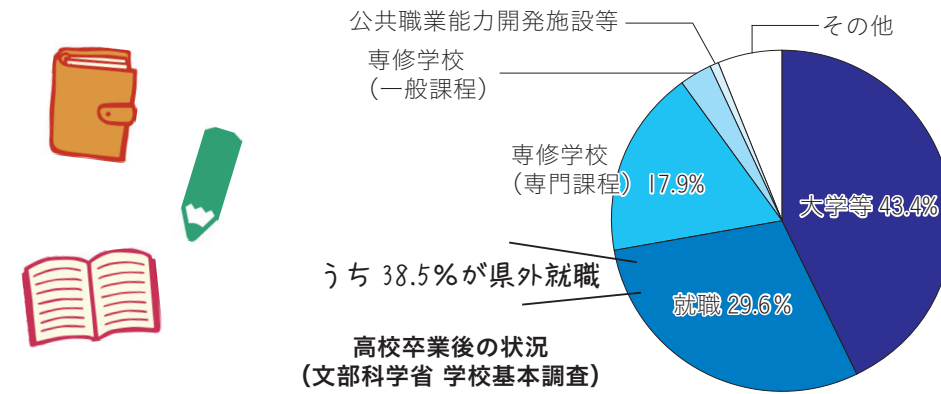
また、地域の方が地域の魅力をどのように活かし、あるいは課題をいかに解決しようとするのかを目的とする。

当たり前にすることで、地域の働き方や暮らし方のイメージを具体的に知ることが出来ます。

地域資源に気付く

大学連携の効果の一つとして、地域資源を田辺にきた第三者の目で見てもらうことで、地域の方がその価値を再認識することが出来ます。

つまり、ここにいて当たり前のもので、違う視点で見ると実は思っている以上に誇らしいものであるということです。



～大学はないが、大学生はいるまち～

期待できる効果は？

1. 短期的な効果

- ◇交流人口の増加とにぎわいづくり
- ◇地域資源を磨く
- ◇担い手の創出

2. 関係人口

- ◇出身地・大学に次ぐ「第3の拠点」

3. 長期的な効果

- ◇移住やU・Iターン就職の促進

市と協定等を締結している大学

大学	締結日	協定等の内容
京都大学産官学連携センター	平成19年7月	社会貢献に関する覚書
帝塚山学院大学	平成20年7月	インターンシップ実習による実習生派遣に関する協定
追手門学院大学	平成27年9月	連携協力に関する協定
関西大学	平成28年1月	大学のふるさと協定、企業の森協定
富山大学地域連携推進機構	平成28年1月	同機構との覚書
和歌山大学	平成28年6月	連携協力に関する包括協定
立命館大学 経済学部	平成30年9月	連携・協力に関する協定



締結式の様子（立命館大学）

大学生との交流



大学生みらいサポート事業 『ロカリアル』

ロカリアルとは、Local(地域) + Real(現実)の造語で、若者の地元定着に向けた取組。地域を知って興味を持ち、将来の選択肢の一つに『地元・地域』が入るきっかけを作るため、昨年からは和歌山大学と連携し、市で活躍する若手経営者などと学生が気軽に交流できる場を提供しています。

昨年は『若者』『起業・創業』『移住』『農業』など、市の特色や学生が興味のある分野で開催しました。学生からは「地域の問題について考えるきっかけとなった」「地方で暮らすことや、働くことのメリットを大きく感じた」といった声も。模範としての役割を果たす以外にも、人を通じた市の新たな魅力の発信につながったと感じることができました。

また、事業実施後に学生が自主的に市とつながろうとする動きが複数出てきています。これは、人や団体の取組に興味を持ち、在学中に様々な経験をしたり、将来の選択肢の幅を広げたりするため、学生自ら訪問先に働きかけて受け入れてもらったものです。

今年は寄附講義も

昨年のロカリアルは授業ではなかったため、参加する学生は少数でしたが、今年は授業として開催。門戸が広がり、単位が取れるようになったことで、市を知って興味を持つ生徒が増えるのではないかと期待されます。

4月12日(金)にはオリエンテーションを行い、202名の生徒が履修登録をしました。

大学生がいる街へ

ロカリアル以外にも大学生は市に訪れています。

関西大学と堺市の連携事業の『関大・さかいECOベンチャークラブ』では、天神崎や大塔青少年旅行村、熊野古道など市の自然を体験するプログラムを実施しています。

また、和歌山大学や関西大学が扇ヶ浜海水浴場で海の家を運営したり、追手門学院大学や立命館大学も、それぞれ地域資源の調査やPR活動を行うなど、少しずつではありますが、大学生がいる街となっています。

大学から学生を



田代 優秋 先生
(和歌山大学 客員准教授)

和歌山大学の学生の3割が和歌山県出身、7割が県外となっています。その3割の和歌山県出身者のうち6割が卒業後に和歌山県に残り、7割の県外の学生はほぼ県外へ戻っています。そのため和歌山大学と市との大学連携事業は、あまり地方について知る機会が

ない学生にとって、地方の現状を身近に感じることが出来る良い経験になっています。昨今の大学生は、生き生きと活躍している大人に出会いたいと思っています。親やバイト先の先輩といった小さいコミュニケーションでは学びも刺激も少ない。早い

段階で自分と違う考えの方に出会うことで、視野や将来の生き方も広がっていきます。市では、若くして起業し頑張っている方がたくさんいます。大学連携事業では、そういう方と交流できるような環境を提供していきたいと思っています。

大学生時代にインターシップを通じて、本宮には何度も訪れました。本宮で一番魅力に感じたのは、人の温かさでした。現在、私は大学の先生という立場になり、インターシップを実施する側に。人手が足りない旅館に住み込みでバイトをするなど、様々な経験ができるよう取り組みんでいます。そこでは、

学生の視点で地域の違う価値観を見出したり、問題点を洗い出したりする力を養うことができます。現代は、様々な情報があふれている社会であり、学生たちはそれをどのようにに取捨選択していくかが重要だと思っています。また、いろんなことに挑戦し、たくさん失敗することも経験の一つです。そこで得た経験を、今度は発信する側になってもらえたら嬉しいですね。私としても、今後はインターシップに関わるだけでなく、新しい何かを生み出せるような取組をしたいと考えています。

大島 知典 先生
(阪南大学 准教授)

大学連携は 多くの方々に 支えられています



笠松 亮太
(企画広報課 企画調整係)

大学連携を通じて、市に来る学生は、地域の関わりにとっても刺激を受けています。学生生活の間は、選択肢を広げている最中でもあります。学生の考える将来の方向性に必ずしも

直結するわけではないですが、経験することに意味があると思います。今回、インタビューを受けてくださった4名をはじめ、様々な関わりをしてくださる方々は、この取り組みにとって大切な存在です。そして、市で出会った地元の方の温かさは多くの学

生も感じており、この特集をするに当たって、さらに多くの方に知ってもらい、今後も温かく受け入れてもらえたらうれしいですね。



鈴木 起查生 さん
(本宮で学生の支援)

大学生が本宮に来たときに、活動の支援をしています。学生にとっては、何をすることも学ぶことがたくさん。例えば、間伐体験をするにも、ノコギリの使い方などが分からないなど、大学では学べないことを教えています。学生たちは素直に聞いてくれますし、何より若い子と触れ合うことは私自身とても楽しいです。また、本宮は高齢化が進み、若者

も少なくなっている中で、若者が来てくれてにぎやかになっているのがうれしいですね。

『人』や『自然』の魅力を肌で感じ、現在、本宮で起業(飲食店)して約1年経ちます。本宮に来るきっかけとなったのは、関西大学在学中のゼミ活動の一つであったエコツアーです。そこで、幅広い年代の方々と接することができ、

学生時代の自分にとってはとても刺激的でした。今の学生は、都会に憧れや希望を抱くことが多いと思います。それ自体悪いことではなく、都会だからこそ経験できることもあると思います。しかし、就職を決める際は、働きたい仕事や給料、福利厚生など、何

を優先して決めるのが大事になるのではないのでしょうか。私がお世話になった大学連携。今度は、私が後輩たちを支援していき、将来の可能性の幅を広げる一助になればと思います。

経験が今につながる



森岡 雅勝 さん
(kumano.co 代表)

地域でできることを

学生に対して支援をしていくのは、労力や時間もかなり大変ですが、少しでも学生のためになるようにできればと思います。それが、最終的には地域のためにもなるのではないのでしょうか。今後、学生たちがいろんなことに挑戦し、将来の選択肢が広がるように支援していきたいと思っています。

自分が経験したことを学生にも

